

第4回大賞(金の星賞)受賞作品

「カラーメーター」

埼玉県 埼玉栄東高等学校 二年 岡安茉莉花



賢治のまちから
高校生★童話大賞



大賞／金の星賞

『カラーメーター』

埼玉県 埼玉栄東高等学校二年 岡安 茉莉花

小学校を卒業したサキは、春休みに家から車で十分足らずのところにある遊園地に、母と妹の三人で出かけました。

卒業のお祝い、という訳ではありませんでしたが、この日の主役はサキでした。だからサキが乗りたい乗り物やアトラクションに、母と妹は付き合ってくれました。普段ならジェットコースターが嫌いな母は絶対に乗らなかったのですが、この日は我慢して乗ってくれましたし、お化け屋敷が嫌いな妹も、涙をこらえて付き合ってくれました。

だから、大きな観覧車の脇にひっそりと建っていた「魔法の館」という怪しげな小屋の扉を勢いよく開けて飛び込んだ時も、てっきり二人は後について来ているものだと思っていました。

しかし、ボタン、と閉まった扉を振り返ってみると、そこには誰もいなく、真っ黒な壁と床に囲まれた部屋には、薄暗い電球が一個だけ灯っていました。見るからに不気味なその小さな部屋には、パイプ椅子が一つだけぽつんとあり、前方の壁には、おどろおどろしい装飾が施された大きな鏡がかかっていました。

「お嬢さん、いらっしやい。」

今まで聞いた事も無い様な低い声が響きました。どこから聞こえるのか分かりませんが、背筋に寒気が走るような声でした。

「椅子にお座りなさい。」

そう言われるまま、操られるように、サキは椅子にそっと座りました。

「今日は、お嬢さんのご希望を一つだけ叶えてあげましょう。ご希望は何ですか？」

「急にそんなことを言われても…。」

「時間はありませんよ。」

「ええっ、そんな…。」



「5、4、3、…。」

「待つて！ 私、超能力が欲しいの。」

とっさに昨日のテレビで放送していた超能力者のことが頭をよぎりました。

「かしこまりました。超能力ですね。それでは超能力を授けましょう。ただしこの部屋の秘密を明かしたとたん、超能力はなくなります。それではごきげんよう。はっはっは。」

「ちよつと待つてよ！超能力つて言ったっていろいろあるでしょ。だから私は…。」

本当は瞬間移動能力が欲しい、と言おうとしたサキの声を無視して、

「はっはっはっは。」

と言う声だけが響いていました。その声に我を取り戻したサキは急に冷静になりました。

「まつ、タダだったからね。こんなものだよね。」

と言いながらさつき入ったドアを開けました。すると目の前で、母と妹があせった様子で、

「サキ！」

「おねえちゃん！」

と、サキを探していました。

「ごめん、ごめん。」

そういうながら、サキは母のところの小走りに近寄りました。

「どこに行つてたの！」

「そこそこ。その魔法の館。ほら…。」

と振り返ったサキの目に、先程出て来た筈の「魔法の館」は無くなっていた。

「あれ？」

「おねえちゃん。そんなのどこにあるの？」

「あれ、魔法の館はどこに行つたんだろ？」

といいながら母の方を見ると、母の頭の上に燃えるような真っ赤な円が浮かんでいました。



「なんだろう。これは？」

と思いつながら妹を見ると、妹の頭の上にも母の頭の上にあるのと同じような、だけどころかなり薄い赤色の、円が浮かんでいました。

「その風船どこでもらったの？」

と、妹に聞いてみました。すると妹はきよんととして、

「風船って、なに？」

と言いました。

「何を言ってるの。その赤い風船……。」

と言いかけて、サキは言葉をのみ込みました。

その赤い円形のものには風船ではありませんでした。まず円形でしたが球形ではなく、しかも糸で繋がれる事なく、人間の頭の真上に浮かんでいました。更に、見渡す限り、すべての人の頭の上にありました。大きさはどれも同じくらいで色はすべて赤でしたが、真つ赤なものから殆ど色のついていないものまで色々あり、中には輪郭しかないものもありました。しかも驚いたことに、その色は絶えず変化しているのです。

あまりの驚きに大きな声を上げそうになったサキでしたが、ここで叫んだら変に思われると思って、両手で慌てて口を塞ぎました。

急に考え込んだ様子の子のサキを見て、母は怪訝そうな顔をしました。すると先程まで真つ赤だった円の色が、徐々に薄くなって行きました。妹のは殆ど色が消えて輪郭だけになっていました。

「この赤い円は何なのだろう？」

周り中のすべての人の頭上にある赤い円を見ながら、そういう疑問を持ちつつも、何も口に出来ずにそのまま遊園地での時間を過ごし、家路についたサキでした。しかし、帰りの車の中で、更に衝撃的な事が起こりました。車の窓ガラスに映った自分の頭の上にも、まだ輪郭だけでしたが、その円があったのです。

「ひょっとしてこれが超能力？」

サキは魔法の館でのことを思い出しました。

「もしそうなら酷過ぎる！」



何の意味もないばかりか、目障りな赤い円が絶えずちらついて見えている事に、憤りを感じてきました。

するとそのとたん、さつきまで輪郭だけだったサキの頭上の円が、急に赤くなっていきました。それを見てサキははっとしました。

「ひょっとして、この赤い円は人の怒りを表すカラーメーター？」

サキは、直感的にそう感じました。果たして、車に乗ろうとしたまま窓ガラスに見入っているサキに、

「早く乗りなさい。」

という母の方を見ると、頭上の円は赤くなっていました。その後、一旦色が薄くなった母のカラーメーターでしたが、車が渋滞に巻き込まれると、いらした様子の母のカラーメーターは、再び赤々と色づいたのでした。

魔法の館で授かった超能力が、人の怒りを表すカラーメーターである事は疑いありませんでした。当初はかなり目障りでしたが、数日もするとそれが見えていても気にはなくなり、人の怒りが察知できる分、便利な事もありました。特に、怒っている母にやたらに当たり散らされ無くなったのは、本当に良かったと思いました。

その不思議な能力を持ったまま、サキは中学生になりました。その頃にはカラーメーターが見えることは決して邪魔ではなく、むしろ楽しみにすらなっていました。

周りの色々な人のカラーメーターを見てみると、赤くなり方にかなり個人差がありました。ちよつとした事ですぐ赤くなる人もいれば、あまり赤くならない人もいました。それは生徒に限らず、先生でも同じ事でした。サキはそれを見ながら、人の気持ちの一端を覗ける事を楽しんだりしていました。

「まっ、たいした超能力じゃないけど、タダだもんね。」

と、満更でもなく感じるようになっていました。こうして、教室の窓際最後列に座っているサキは、しょっちゅう皆のカラーメーターを眺めては楽しむ癖がついていました。

六月になった頃の国語の国枝先生の授業中の事でした。その日は新聞の話でした。



「皆さんの家ではどんな新聞を読んでいますか？」

と、先生が尋ねました。それぞれが思い思いに、自分が普段読んでいる新聞名を口にしましたが、ミノルという男子が座ったまま大声を出しました。

「俺んちニューヨークタイムズ！」

その声に、クラス中が大爆笑になりました。国枝先生は表情を変えなかったのですが、カラーメーターは燃え上がるように真っ赤になりました。

「先生、凄く怒ってる。」

国枝先生のカラーメーターは、授業中に色が薄くなることはありませんでした。

サキはいやな予感がしました。そしてその予感は残念な事の中しました。

「今日は宿題を出します。今日読んだ教科書の範囲から自分の苦手な漢字を十個選んで、それぞれにつき、一ページずつ漢字ノートに書いてきなさい。

期日は明日。」

「えーっ、そんな。」

「明日迄に十ページなんて出来ないよー。」

そういうクラスの全員のカラーメーターが赤くなっていました。反対に、その生徒達をにやっとなつて笑って見た国枝先生のカラーメーターは、色が薄くなっていました。

サキも自分のカラーメーターはきつと真っ赤だろうと思ったのですが、その時、一人だけ輪郭だけのカラーメーターを頭上に掲げている生徒がいるのに気付きました。それはユリでした。

「ユリは怒っていないんだ。」

そういえば、ユリのカラーメーターが赤くなっているのを見たことはありませんでした。でもその時は、特に気にも留めませんでした。

それから数日後の掃除の事でした。汚れた水の入ったバケツを持って流しへと歩いていったサキは、誰かが置いたモップにつまづいてよろめき、バケツをひっくり返してしまいました。バケツからこぼれた汚い水が周りにいた何人かの子の制服にかかってしまい、その子たちのカラーメーターが見る見る間に赤くなって行くのを目にしたサキは、

「わっ、ごめんごめん。すいませーん。」

と言って、慌てて水を拭き取ろうとしました。

しかしその時、一人だけ、水がかかっても、カラーメーターが輪郭のままの子がいました。それはユリでした。

「ユリって怒らないんだ。そういえばこの前の宿題の時も怒らなかった。」

ユリはほっそりとしていて背が高く、見た目は目立ちそうでした。しかしそれでいながら教室では目立つ存在ではなく、それだけ控えめな性格だったのかもしれない。実際、サキは今までユリのことを気にしたことがありませんでした。

しかしこの事件があつて以来、サキはユリのが気になって仕方なくなりました。それで暇があれば自分の席から二つ前で一列右側の席に座っているユリを見ていました。きっとカラーメーターが赤くなる時はある筈だ。だとしたらそれはどんな時なのだろう。そう思いながら、しばしば、後ろからユリを見ていました。時々振り返ったユリと目が合つて、ドキつとすることがありました。でも、ユリのカラーメーターが赤くなることはありませんでした。

こうなると、何とか赤くなったユリのカラーメーターを見てみたい、というサキの思いは強くなる一方でした。

そこで、ある日サキはユリの似顔絵をわざと変に描いて、休み時間に席を立ったユリの席に置いてみました。早速隣の席の男の子がそれを見つけて大げさに騒ぎ立てました。その場で笑いの渦が起こり、それがサキが描いたものであることがすぐ知れ渡りました。そこへユリが戻つて来て、その絵を見つめました。それは正にサキが計画した通りの状況でした。サキは期待に満ちて思いました。

「さあ、今度こそカラーメーターが赤くなるぞ。」

しかし似顔絵を見たユリは、にっこり笑つて、
「これはよく描けてるね。」

と、サキの方を見たのでした。その笑顔には全く影はなく、心の底からそう思っているというような表情が見て取れました。その表情を見て、サキは少



し罪悪感に苛まれました。

それで、しばらくの間はユリのカラーメーターをわざと赤くすることは諦めました。でも、いつかはそんな状況を見てみたいという気持ちには変わりがありませんでした。だから、ユリを見つめるのを止めはしませんでした。そのうちサキは、ユリのある行動に気付きました。ユリが、ある男子の方を気にしてしばしば視線を注いでいたのです。

その男子は、ケンタでした。

ケンタは決して目立つ存在ではなく、どこにでもいる極々普通の男の子でした。でも悪い印象もなく、おとなしそうなユリが好きになったとしても、不思議ではないような気がしました。

その日も、サキはユリの方を気にしてしばしば見ていました。すると、ユリも時々ケンタの方を見ていました。

「こりゃ、間違いない。ユリはケンタが好きなんだ。」

そう思いながらユリを見ると、ユリが突然振り向ききました。バツチリ目が合ってしまったって、サキは慌てて目を逸らしました。

その瞬間、いたずら心がむくむくと、サキの心の中に頭をもたげてきました。

「今度こそユリのカラーメーターを赤く出来るかも。人間は凶星を突かれると怒るからね…。」

そう思いながら、しめしめと思いました。

その日の放課後、掃除当番や日直も帰った後、授業も上の空にしてまで入念に練った計画に基づいてサキは黒板に向かいました。それは古典的な方法でしたが、黒板の隅に相合傘を書いて、その下に、ケンタ・ユリ、と書きました。

次の日、サキはいつもより少し早く学校に来て学校の裏にある小高い丘に登り、校門から登校してくる生徒達を見ていました。そのうち遠くから歩いてくるユリの姿を見つけたサキは、すばやく昇降口の近くに身を隠し、ユリが上履きに履き替えて教室へ向かうのを確認した後、自分も教室へ向かいま



三メートル程前を歩いていたユリが教室に入った途端、既に半分程登校していた生徒の間で、わっ、という歓声が上がりました。サキはその瞬間を見逃すまい、と、教室に駆け込み、そしてユリの頭上を見ました。

「ケンタとユリはラブラブ！」

そう囁し立てる男子の声をきっかけに、教室は騒動に包まれました。その渦中でユリは懸命になってケンタとの事を否定し、教壇に上がって相合傘を消そうとしていました。

「さあ、今度こそ真っ赤になるわ。」

そう確信して、サキはユリの方を見ていました。

しかし、予想に反してユリのカラーメーターはずっと輪郭のままでした。そして、くるっと振り返ったユリと目が合いました。

その時のユリの表情は…。

サキは、人の眼差しにこれ程の深い悲しみが宿ったのを見たことはありませんでした。その視線はサキの心を深くえぐりました。呆然として言葉を失ったサキを見て、ユリはまるで全てを悟ったかのように、相合傘を消すことなくサキに向かって歩いてきました。そして少し離れた所で立ち止まって、じっとサキを見つめました。

ちよつとした間があって、ユリの目から一すじ涙が流れ落ちました。その涙は、サキに取り返しのでかない事をしてしまった事を悟らせるものでした。

ユリはサキの横を通り過ぎると、小走りに教室を出て行きました。一瞬間があつた後、サキはユリの後を追いました。ユリは昇降口で靴に履き替えることもなく、上履きのまま、登校してくる人の流れに逆らって、外へ駆け出していきました。サキも上履きのまま、必死にユリの後を追いました。

「ユリ、待って。」

しかし、ユリは立ち止まることなく、裏門から先程までサキがいた小高い丘へと駆け上がっていきました。サキもその後を上がつていきました。

丘の上にある桜の古木の下にたどり着いた二人は、そこで向き合いました。が、気まずい沈黙が流れるばかりでした。

「…ごめんなよ。」



沈黙を破ったのはサキでした。深く頭を下げてそう言うサキを、ユリは相変わらず悲しみを湛えた目で見つめていました。

「本当にごめん、ユリ。私が悪かったよ。」

「いいの。サキ。分かっているから。」

「分かっているって…。」

サキには、ユリが「分かっている」と言った意味が分かりませんでした。

「サキには悪気はなかったのよね。それが私には分かるから。」

「えっ、でも…。」

サキは、夢中でなぜ自分がこんなことをしたのかを話しました。そして、自分のささやかな超能力が失われる事も予感しながら、あのカラーメーターの事も話したのです。

「…そうだったの。」

話し終わったサキの目を見て、ユリはそう言いました。その目からは、いつの間にか先程の悲しみは消えていました。そして、ユリの口から、思わぬ話が語られたのです。

「実はね、私にも、そのカラーメーターみたいなものがあるの。」

「えっ。」

「ただ、私のは怒りのエネルギーじゃなくて、人の気持ちの純粋さを表すものなの。それにね、頭の上じゃなくて、胸と背中の中、ハートのところにあるのよ。」

「やっぱり色が変わるの?」

「そう。純粋な気持ちを持っている時は透明で、不純な気持ちの時は黒いハートマークが、その人の胸と背中に見えるんだ。」

「いつから?」

「クリスマスの頃。サキと同じ遊園地の、魔法の館で貰った超能力なの。」
ユリは続けました。

「今まで、私のカラーメーターが赤くなった事が無いのと同じように、私に見えるハートマークが、黒くなった事が一度もない人が二人だけ居たのよ。それが、

サキとケンタだったの。だから、私もサキと同じように、いつか、この人たちのハートマークが黒くなったところを見てみたいと思って、サキとケンタをよく見ていたのよ。」

「なんだ、そうだったのか。」

「うん。だからサキが私にいたずらをして、何とも思わなかったわ。だって、ハートマークは黒くなっていなかったから。でも、さすがに今朝は悲しかったよ。」

と言って、ユリは微笑みました。

「本当にごめん。でも、…良かった。」

「良かった、って。でも、超能力が無くなっちゃったんじゃない？ 私にはもうハートマークが見えないよ。」

そう言われたサキがユリの頭上を見ると、確かにカラーメーターは見えませんでした。

「でもいいや。やっぱり人の気持ちなんて覗かない方がいいって思ったから。」
サキはさっぱりした口調で言いました。

「そうね。それに私は超能力よりもっと大切なものを見つけたから。」

「大切なもの？何それ？」

サキはきよとんとしてユリに問いかけました。

「大切な友達。」

「えっ…？」

サキは目を丸くしました。そんなサキに、ユリはふわりと微笑みかけました。